東京郊外における軍事化の果て

――『大和（カリフォルニア）』が映す厚木基地と地域の関係――

後　藤　美　緒
松　下　優　一
塚　田　修　一

目　　次

1. はじめに
2. 大和地域の郊外開発と厚木基地
3.『大和（カリフォルニア）』が映す大和
4. おわりに

1. はじめに

「ここまでが，大和であっちは，カリフォルニア」「奪われた，怒りと声を取り戻せ」。そんな印象的なキャッチコピーが付された映画『大和（カリフォルニア）』（宮崎大祐脚本・監督，2016 年）は，在日米軍厚木海軍飛行場（以下，厚木基地）に隣接する神奈川県大和市を舞台に，その地でラッパーを志す十代の少女の姿を通して，米軍基地がある東京郊外に漂うリアリティを鮮やかに描き取っている。タイトルは，厚木基地がアメリカ・カリフォルニア州に属するという都市伝説からのようだが，大和市がアメリカの一部を，あるいは日本という国が米軍基地を内包しているさまを如実に表現しているともいえ，映画に孕まれる問題提起的な姿勢がうかがえよう。

> 神奈川県大和市。この町は戦後米軍基地と共に発展してきた。厚木基地の住所はカリフォルニア州に属しているのだという都市伝説があるという。この町に住む十代のラッパー・長嶋サクラは日本人の母と兄，母の恋人で米兵のアビーに囲まれ，この町同様，複雑な関係性の中で育ってきた。アメリカのラッパーに憧れて，サクラは毎日ラップの練習と喧嘩に明け暮れる。ある日，アビーの娘・レイがカリフォルニアからやってくる。日米のハーフで，サンフランシスコで生まれ育ったレイ。好きな音楽の話をきっかけにして 2 人は距離を縮めていくのだが――。（劇場配布チラシより）

本稿では，この映画を手がかりに，大和における在日米軍基地とその周辺地域の関係，東京郊外における基地のプレゼンスについて論じたい。この作品は，基地がある郊外のリアリティを考えるうえでも，また「16 号線的郊外」（東・北田 2007）と呼ばれるような国道 16 号線沿線地域の歴史・社会的現実を考えるうえでも，重要な参照点を提供する文化テクストとして位置づけられるように思われるからだ[1)]。

以下，あらためて作品の舞台となる大和市および厚木基地の成り立ちと現在に至る歴史的経緯を振り返り，この映画の社会学的意義を明確化したい（第 2 章）。そのうえで，主人公の行動圏などに着目し具体的にこの映画は大和のどこをどう映しているのかを分析し，映画が可視化する 2000 年代の大和について記述する（第 3 章）。最後に

本稿の知見を米軍基地文化研究の視点から位置づけ，総括する（第 4 章）。なお，2 章は松下，3 章は後藤（ただし，1 節は松下），4 章は塚田が分担執筆する。

2．大和地域の郊外開発と厚木基地

（1）大和地域の郊外開発

神奈川県のほぼ中央部に位置する大和市は，面積約 27km^2・人口約 23 万人，地図で見れば市域は南北に細長く，東は横浜市や町田市，北は相模原市，南は藤沢市，西は座間市・海老名市・綾瀬市に接している[2)]。市内を南北に横断する新宿方面からの小田急江ノ島線を縦軸に，中央部の大和駅は横浜と海老名を結ぶ相鉄本線が交差するほか，北部の中央林間駅は東京渋谷から伸びる東急田園都市線の終着駅になる。東京から 40km 圏，主要都市に隣接し，交通の便がよい大和市は現在，県内有数の人口密集地域となっているが[3)]，1959 年，大和町（現在の市域北部）と渋谷村（南部）の合併による発足当初の人口は約 3 万 5,000 人だった。

大和の地名は，明治期 1889 年の町村制施行に伴って下鶴間村・深見村・上草柳村・下草柳村の合併で生まれた「鶴見村」の内部対立を収拾すべく，県知事の提案により「大いに和する」の意で「大和村」に改名したことに由来する[4)]。かつて相模原台地の大部分がそうであったように，大和一帯も街道沿いの町場を除けば，林野のひろがる農村地域だった。この地域が都市化する発端は，東京・横浜に直通する鉄道路線が開通した 1930 年前後のことである（神中鉄道［現・相模鉄道］および小田原急行鉄道江ノ島線開通）。このとき小田急の創設者・利光鶴丸は，相模大野から分岐する江ノ島線の沿線エリア，現在の相模原市南区から大和市北部一帯にかけ「林間都市」と称する郊外ニュータウンを構想し，東林間都市・中央林間都市・南林間都市の各駅を設置，沿線開発を図った。移住者は伸び悩み，開発は滞り，1941 年には駅名から「都市」が削除されたものの，小田急の林間都市計画はこのエリアにおける郊外開発史の端緒となった[5)]。東京都心へ乗り入れる，もうひとつの鉄道路線＝東急田園都市線が大和市域に延伸されるのは，1970 年代（1976 年つきみ野駅開業，84 年中央林間駅開業）。こちらも東急による「田園都市開発」という郊外ニュータウン開発を伴うものであった[6)]。

他方で，大和地域の開発または都市化という観点からみれば，私鉄による沿線開発のほかに，戦時中の軍部による軍事的開発もまた見落とせない。鉄道路線は，軍にとっても重要なインフラだった。『健康都市やまと総合計画 2019-2028 年度』によれば，大和市は，林間都市開発と田園都市開発とを基盤とする「北のまち」のほか，戦時中の「軍都計画」に基づいて市街地整備が進められた大和駅周辺の「中央のまち」，昔ながらの風景を残す「南のまち」（旧渋谷村）という 3 つのエリアに分けられるという（大和市政策部総合政策課編 2019：7）。1940 年代初頭，大和村および周辺地域には，海軍の軍事施設が相次いで進出し，海軍相模野航空隊（1942 年，旧綾瀬村），海軍厚木航空隊および厚木飛行場（43 年，旧綾瀬村・旧大和村），高座海軍工廠（44 年，旧座間町）および工員宿舎（旧大和村）などが設置された。海軍の軍事施設とその建設に伴う，周辺地域への軍人や労働者ら（台湾からの少年工や朝鮮半島出身者が数多く含まれていた）の移住により，人口が急増した大和村および渋谷村は，1943 年に町に昇格。大和は海軍飛行場と海軍工廠を核として「新興工業都市土地区画整理事業」の対象地域になる。これが，いわゆる「軍都計画」で，全国 23 カ所で実施された新興都市計画事業のなかでも，大和のそれは大規模なものだった。軍を主体とする地域開発（軍都化）の動きは敗戦により頓挫するが，大戦期における都市計画は，戦後も規模の縮小・修正を経て継続され，現在の大和駅周辺の基盤となっているという[7)]。

このように大和の一帯は，戦前・戦中・戦後を通じ，異なる主体と論理による郊外開発の対象となり，軍民の郊外開発の果てに現在の大和市の基盤が形づくられているといえる。そして，大戦期の大和における軍事化（軍事的な地域開発）の最大かつ明白な名残りが厚木基地にほかならない。

（2）厚木基地と周辺地域の戦後

周知のように神奈川県は，在日米軍基地の約7割が集中する沖縄県，三沢基地がある青森県に次いで，全国3位の「基地県」とされ，在日米陸軍司令部のあるキャンプ座間（座間市・相模原市），相模総合補給廠（相模原市），横須賀海軍施設（横須賀市）などが置かれている（栗田編 2011；栗田 2020）。なかでも厚木基地は，県内最大の基地面積を有し（約507万 m^2），大和市の西域に位置，その敷地は綾瀬市・海老名市にまたがっている（敷地自体の大部分は綾瀬市）。この基地の名称は，所在する自治体名とは一致せず，神奈川県を南北に縦断する相模川の西岸を市域とする厚木市に対し，厚木基地は相模川の東岸の段丘上に位置する。前身となった日本海軍の厚木飛行場は，玉音放送後も数日にわたって基地司令が徹底抗戦を訴えて立てこもった「厚木の反乱」やダグラス・マッカーサーが降り立ったことで日本近現代史の転換点に登場する基地であるが，前述のように開設は1943年と遅く，当時の「村民が飛行場建設の話を具体的に知ったのは全く突然であった」という[8)]。

戦後，占領軍に接収された厚木基地は，朝鮮戦争の前線基地となり，アメリカ海軍第七艦隊所属の艦載機の修理・補給および偵察を行う基地として拡充されることとなった。駐留兵士の増加に伴い，大和地域，とくに相模鉄道の相模大塚駅や小田急線の大和駅の周辺には，米軍兵士相手の土産物店やクリーニング店，飲食店や特殊飲食店が集積し，米兵相手の業者や娼婦らが集まり，いわゆる“基地の町”が形成されていたようだ。「完全な横文字の町」と題された1961年の現況報告には，「横須賀が同じ“軍都”でも，そこには，旧帝国海軍の消費力を支柱として来たのとは全く意味を異にし，文字通り，その生誕の第一歩からドル経済のウズの中で育った」町があり，「町の姿がたとえ安っぽいペンキ塗りの“横文字”のハウス造りであったにせよ，何か完全に“日本人のいない町”としてバタくさいエッセンスでおおわれている」との概況説明がある[9)]。ベトナム戦争期の60年代まで多くの米兵の姿が見られたというが，大和の基地の町としての色彩は，東アジアでの大規模戦争の終了とともに薄れていったようだ[10)]。現在の大和市街地に目を凝らしてみても，（少なくとも表面的には）米軍基地の街としての色彩を見て取ることはできない。

その一方で，厚木基地自体は，1950年代末に滑走路の延長工事が行われ，大型ジェット機の離着陸が可能になるなど拡充され，戦闘機が日夜離着陸や訓練をくりかえすようになる。近隣農家の集団移転が行われたが，60年代以降，基地周辺は，何もない郊外の農村地域ではなくなっていった。

> このあたりは東京都心から一時間半の新住宅地。家がつぎつぎ建ってくる。飛行機の飛ばない日曜日に土地業者に案内され，これならと契約をすませ，後日訪れて見ると鼓膜をやぶらんばかりの騒音に，キモをつぶす人があとを絶たない。（『朝日ジャーナル』1969年6月29日号：6）

1980年代初頭には，横須賀を母港とする空母ミッドウェーの艦載機による夜間連続離着陸訓練（NLP）も開始される。20世紀後半，大和の一帯は，人口密集地の上空を，各種軍用機が低空飛行し，日常的にジェットエンジンの爆音が轟く，航空機事故のリスクの高い地域と化していくのである[11)]。

（3）東京郊外における基地の存在様態への問い

厚木基地と地域社会の関係について考える場合，まず注目されるのは，基地の周辺住民が結成した「厚木基地爆音防止期成同盟（爆同）」の活動だろう[12)]。爆同の活動を含め，地域社会に対して現れる米軍基地の環境面での影響については，朝井志歩『基地騒音―厚木基地騒音問題の解決策と環境的公正』が環境社会学的なアプローチを試みている（朝井 2009）。それによれば「軍事施設の存在は，地域社会に多大な影響をもたらす」ものであり，「土壌や水質の汚染，軍用機による騒音や墜落の被害など，施設の周辺で暮らす住民の生活環境を著しく悪化させるため，軍事施設は住民に対する巨大迷惑施設」（朝井 2009：5）と位置づけられる。

しかし他方で，栗田編（2011）が，横須賀において観光化されたドブ板通り，基地開放イベント，あるいはサブカル系の出版物（『秘密に満ちた米軍基地を 100 倍楽しもう！ フェンスの向こうのアメリカ探検【在日米軍基地完全マニュアル】』1994 年，『日出づる国の米軍―米軍の秘密から基地の遊び方まで「米軍基地の歩き方」』1998 年）などを概観しつつ指摘する「神奈川県では，戦争が見えなくなり，基地がまるでテーマパークのように身近な存在となり，米軍もオープンな態度を示しているように見える。［中略］神奈川県の米軍基地の位置づけが沖縄と大きく隔たっているとは思えない。現実には神奈川県においては基地問題への関心は低い。この落差は何なのだろうか」（栗田編 2011：209）という現状および問題提起もまた，現在の基地と地域の関係を考えるうえで重要であるにちがいない。

現在，東京郊外において米軍基地は「巨大な迷惑施設」としてあるのか，それとも米軍基地さえも観光資源化ないしテーマパーク化する現代日本社会の趨勢のなかでテーマパーク的存在としてあるのか。基地問題に対する沖縄と本土の温度差はしばしば指摘されることであるが，それは単にメディア報道の問題ではなく，その根底には地域における米軍基地のあり方，プレゼンスの違いが関わっているのではないか。米軍基地と地域の関係については沖縄を焦点に研究が蓄積されているが，首都圏における基地に隣接して暮らす人びとの生活世界，基地がある郊外のリアリティを描き取るような試みは，十分になされていないように思われる。

東京郊外において米軍基地は，いかなるものとしてそこに在るのか。基地はそれが所在するローカルな地域に対して，どのようなプレゼンスをもっているのか。映画『大和（カリフォルニア）』は，ひとまずこのような問いに応える文化テクストとして位置づけることができるだろう。

次章では，具体的な物語内容に寄り添いながら，厚木基地が所在する地域としての大和のリアリティについて検討していくことにしたい。

3.『大和（カリフォルニア）』が映す大和

（1）そこに存在する不在としての基地

監督・脚本を手がけた宮崎大祐は，1980 年横浜生まれ。母方の親族が大和だといい，「高校時代から本格的に大和に住むようになりましたが，反抗期の少年にあの騒音はまさに火に油で，毎日毎日イライラしていましたし，街の誰も憤らないことに強い疑問をいだいていました」と述べている（「宮崎監督が語る“大和市”」映画パンフレット：6）。

映画の主人公・サクラ（韓英恵）もまた，苛立つ者として登場する。映画冒頭，外を歩けばヤンキー女子たちと火花を散らし，家の中でもつねに不機嫌な様子を示す彼女にとって，日常的に響き渡る基地の軍用機の轟音は，その苛立ちを倍加させているようだ。

サクラは，パートのかけ持ちでいつも忙しいシングルマザーの母親，アニメの同人サイトを運営する兄と 3 人で，木造平屋の家屋に同居している。父親については語られないが，かつて母の恋

人であった米軍兵士アビーと同居していたといい，サクラはアビーに教えてもらったラップ音楽を愛好している。半ば引きこもりの兄との仲は険悪で，バイト先のうなぎ屋も開店休業状態。唯一くつろげる場所は，近所の廃品置き場に打ち捨てられたキャンピングカーであり，彼女はしばしばそこで作詞に励む。

物語は，サクラの家に，アビーの娘レイ（遠藤新菜）がやってくるところから展開する。沖縄出身という母親が他界し，カリフォルニアのアビーの実家で生活しているというレイは，飛び級で大学入学が決まっているという聡明かつ社交的な女子高生で，サクラとは対照的な存在として現われる。そんなレイから，サクラはいつも行っているところへ連れて行ってほしいとせがまれる。原付バイクで一日大和の街を巡ったあと，秘密基地である廃品置き場のキャンピングカーへと連れていくのだった。

打ち解けた2人は，音楽の話で盛り上がるが，やがてレイはサクラに歌うようにしつこく絡み始める。なかなか歌おうとしないサクラ。日本人のラップなんてアメリカの「コピー」にすぎないと挑発するレイ。2人は喧嘩になり，レイにケガをさせたサクラは，家出する。しかも，敵対する不良女子グループに遭遇してしまい，逆襲を受ける。昏倒したサクラは，路上生活者らしき数人に助けられ，基地の敷地と思しきフェンスの向こうへと運ばれるのだった。彼女が，目を覚ますとそこは緑の茂み，草地のひろがる場所。草原の片隅に打ち捨てられた廃屋には，楽器を奏でる男たちがいる。幻想とも現実ともつかない世界で，サクラは声を絞り出す。

映画のクライマックスは，市が主催するのど自慢大会に現れたサクラのラップ・パフォーマンスである。会場にはレイやサクラの家族も集まっている。その前で彼女は，ライムをきざむ。以下は，そのリリックの一部。

（……）自分の足で　この足で　たちあがるということ
やっとみつけたこの声　この居場所　インデペンデント
へい大和　応答せよ　わかってんでしょ　コピー元の無い本物になれるんだよウチら
澄ませよ耳　聞けよ声　死者の声　生者の声
ぜんぶまとめて生きてやる
これからはじまる　この国のストーリー
まだ何もしてないけど　このままだとほんと何もしないで死にそう
格差何さ　底辺ではなく　こちら前衛（……）

「大和」に向けられた独立，コピーからの脱却，「この国のストーリー」の開始への呼びかけ。格差社会の「底辺」を「前衛」として捉え返し，自らの足で立とうとする意志表明。ここで「大和」は，映画の舞台となっている大和市にとどまらず「この国」＝日本という国を含意しているのは明らかだろう（これは，とくに日本人の観客へと向けられた，この映画自体のメッセージだといえる）。

このように『大和（カリフォルニア）』は，「大和」という地元を生きる主人公が，ステージに上がってパフォーマンスするまでを描いている。ラップという表現形式の身体化を通じて，サクラは表出の回路を持たなかった情動を言語表現に転化していくわけである。

この映画は社会学的に興味深い論点をさまざまに含んでいるが，前述のように本稿で注目したいのは，米軍基地の表象，基地と地域の関係がどう描かれているのかという点である。監督は，大和における基地と地域の関係についてこう語っている。

厚木基地の兵隊さんたちはほとんど外に出て来ません。敷地内が広大でそれだけでほぼ町を形成し，事足りるため，外に出てくる必要がないのです。ですから横須賀や沖縄などと

違い，地元住民は騒音以外には彼らとはほとんど接点がなく，まさに近くて遠い他者なんです（「interview 宮崎大祐」映画パンフレット：2，下線引用者）

［厚木基地は］中を覗けないようになっているので，一年に数回あるお祭りの日にパスポートをもって中に入る以外はなかなかなにが起きているのかわからない状態です。本当にあの騒音だけが一方的なコミュニケーションといいますか，そんな感じです（「宮崎監督が語る“大和市”」同上：6，下線引用者）

人的な接点のなさ，内部の不可視性，騒音というかたちでなされる一方向的なコミュニケーション。このような非対称性が，大和における基地と地域の関係をしるしづけているというのだ。実際，映画において，大和におけるアメリカ＝基地の存在は，セリフをかき消すように重なる軍用機の騒音やフェンスによって示されるのみで，米兵や軍用機や基地内部の様子が直接的に映し出されることはない。

物語上，サクラとラップ，またサクラの家族とレイを媒介するという重要な役割を果たしているアメリカ軍人アビーだが，会話のなかだけに登場し，姿も声も提示されない（手紙だけが家族のもとに届く様子）。しかし，アビーは直接現前しないまま，登場人物の存在や関係を大きく規定していることも確かである。不在のアビーとは，大和における不在のアメリカ，いいかえれば内部の見えない厚木基地の隠喩であると解釈できよう。とすれば，サクラの〈父〉が不在であることの意味もまた象徴的な意味をもっていることになるだろうが，ここではひとまず大和におけるアメリカ＝厚木基地の存在が，地域住民にとって不可視なもの，コミュニケーション論的な非対称性において語られていることが押さえられれば十分だろう。

では，映画は，大和のどこをどう映しているのか。

（2）空っぽの空間――基地のある街

木造平屋の 2 DK に住む長嶋家は，一部屋を母親の寝室，もう一部屋を兄と共有する子ども部屋として使用している。ただ，その子ども部屋は兄が作業をするため，サクラは自宅に居場所がない。もっとも，騒音がいつ届くかもしれない自宅はリリックづくりに向いているともいえない。サクラは常に怒りをまとって家族とぶつかり，昼も夜も愛車の原付バイクで移動し続ける。私たちはサクラの移動を通して大和の景観を垣間見ることができる。たとえば，ライブハウスや駅前広場，ディスカウントショップやショッピングモール，さらにはキャンピングカーのある廃品置き場，草地のひろがる広場である。

興味深いことに，これらのいくつかはある特殊な音，すなわち軍用機による「騒音」が聞こえるという点で共通している。映画の冒頭では，一人ライムをきざむサクラの姿が映される。ベニヤ板や冷蔵庫，自転車，消火器がうず高く積まれところどころにブルーシートが無造作にかかっている廃品置き場で，サクラは自分の世界を守るようにパーカーのフードをかぶり長いリリックを紡いでいく。だが，突然，地響きのような重低音が頭上から届き，サクラはフードを外して上空をにらみつける。サクラが見上げる上空には大型の飛行機が飛んでいる。

また，親しくなったレイとサクラがたわいもない会話をしながら歩く道すがらでも，低いプロペラ音が響いている。障壁の無い屋外において，音はダイレクトに人びとに降り注ぐ。

こうした音の存在はサクラの自宅でも描かれる。朝，目覚めたサクラが自室の窓を開けると轟音が響く。さらに，軒先で洗濯物を干したり，近所にゴミを捨てたりと日々の生活を送るなかでも聞こえる。しかも，音が聞こえるのは日中だけではない。レイと過ごす今後を思って寝つけないサ

クラが荒々しくカーテンを引くのは，夜が更けていると同時に，重低音が聞こえたからだ。騒音は生活の一部に，しかも音量もタイミングもコントロールできないものとして描かれる。

なぜこのような轟音が発生してしまうのか。劇中において飛行機やヘリコプターははるか上空を飛んでおり，離発着する姿が映し出されることはない。だが，その理由については，登場人物たちのある推察から，私たちは知ることができる。

パソコンを購入するためにまとまった金が必要だと，中学時代の同級生を近所のコンビニに呼び出して相談するサクラに，友人は賞金を目指して市主催ののど自慢大会への出場を提案する。ここで，「そういえば」と提案を切り出す友人の言葉は，轟音にかき消され，サクラとの間に何度かやり取りがくりかえされる。副賞の賞金が高額であることに驚くサクラ。それに対して同級生は「基地の交付金とか，そんなのがあんだべよ。毎日毎日，うっせえからなあ」と説明する。サクラもまた「大和市，金持ってんなあ」と続ける。真偽のほどは定かではない。だが，そう言って互いに納得するのが「大和市」民であることが示される。

このように，この街にある基地とそこから飛び立つ軍用機が，日常生活で同居する。さらに，余暇の延長線上にあるイベントにおいても何かしら影響を持っている。騒音はこの街に基地があること，そしてどのような存在かを示すものとなっている。

では，その姿は劇中で具体的にどのように映し出されているのだろうか。そのひとつは有刺鉄線付フェンス越しの景色だろう。低層の，しかし建築面積は広い無数の建物群と芝生の緑地帯がフェンス越しに映し出される。ただ，それらの建物群には看板が付いているわけでもなく，関係者以外は建物の機能はわからない。

在日米軍の機能は基地毎に定められており，それに伴って厳重に敷地が管理されている。厚木基地は航空機の整備，補給，支援が主たる業務である。基地はコンクリート塀と有刺鉄線付フェンスで囲まれており，中に入るためには正門等のゲートを通過する必要がある[13)]。

映画において，基地の表である正門が映し出されることはない。だが一方で，サクラが原付バイクで移動する際の背景にしばしば有刺鉄線付のフェンスがみえる。フェンス越しにみえる，何をするのかわからない建物群が，日常生活で目視可能な基地の全景なのである。

さらにもうひとつ基地がみえる場面がある。それがサクラとレイが緑地帯にあるフェンス越しに国境を叫ぶ箇所である。ラップを通して親しくなった2人はサクラのお気に入りのライブハウスに出かけるが，レイがルール違反をして追い出される。咎められてハイテンションになった2人は自宅に帰らず朝まで外で過ごし，広場にたどり着く。レイが朝焼けを仰ぎみながら「どこここ，空めっちゃきれい」とこぼすと，サクラが「日本じゃないけど」と続け，「ここまでが，大和であっちが，カリフォルニア」と声をあげる。二人がもたれかかるフェンスの先には，自動車の行きかう道路と有刺鉄線のフェンスがある。そして画面いっぱいに，芝生と思しき整えられた緑地のひろがる空間が映し出される（写真1参照）。「あっちが，カリフォルニア」と指さした空間は，サクラ

写真1

サクラが国境を叫ぶ緑地帯（2021年8月夕刻　後藤撮影）

が住む狭い家，そこにたどり着くまでの細い道，自宅から足を運ぶショッピングモールやディスカウントショップとは全く対照的に，何もない空間がひろがる。この街には，何もなく，何をするのかもわからない空間が存在しているのだ。

しかし，有刺鉄線とサクラのセリフから，この場所が基地の一端であることが判明する。実際にこの場所は滑走路の果てだからこそ建築物がないのだが，そうしたことを知らない私たちは，レイと同じように「きれい」な緑地帯にみえるだろう。何もない，あるいは機能をあずかり知れない，だがその存在があるからこそ騒音が発生するものとして基地があり，それを抱えているのが大和であると映画は示している。

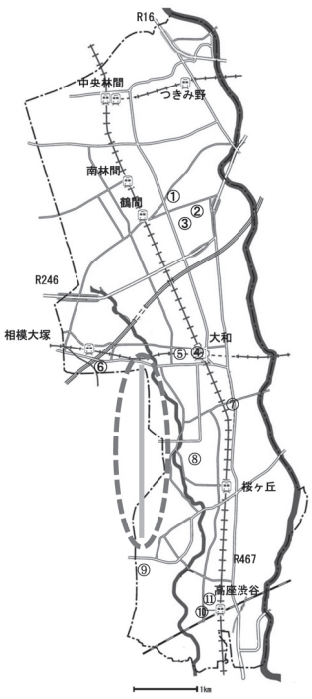
(3)『大和』と大和市

ところで，サクラたちが現れる場所は大和市のどこなのか。実際に自動車で大和市を走ってみると，私たちは劇中の大和にある程度，到達することができる。縦横無尽に市内を原付バイクで移動するサクラの背景に移りこむ道路標識や，エンドロールに示されたロケ地など，手がかりがあるからだ。そこで，作品の舞台となった実在の街に足を踏み入れながら考察を継続したい。

以下で少しずつ確認するように，サクラがリリックを披露する駅前の広場は小田急江ノ島線と相鉄本線の乗り換え駅である大和駅（④）の駅前広場であり，レイを連れていくショッピングモールやディスカウントショップは鶴間駅からも徒歩圏内のドン・キホーテ（②）や大和オークシティ（③）であり，国境を叫ぶ草原の広場はやまとゆとりの森（⑨）である。大和市の地図にその地点を落とすと，それは図１のようになる。

地図からはサクラが現実の大和市を縦横無尽に

図１



・同級生と会うコンビニ
　→① セブンイレブン
・リリックをつくるキャンピングカーの置かれた廃品置き場
・サクラがレイを連れていくディスカウントショップ
　→② ドン・キホーテ大和店
・サクラとレイがウィンドウショッピングをするショッピングモール
　→③ オークシティ大和
・サクラがレイを連れていくマンガ喫茶
・リリックを披露する駅前広場
　→④ 大和駅前のロータリー
・バイト先
　→⑤ 鰻料理店『最上川』
・サクラとレイが路上生活者たちを見かける
　／サクラがキムに襲われる歩行者道路
　→⑥ 桜森いこなーど
・襲われたサクラが助けられた草地のひろがる場所／路上生活者たちの歌う廃屋
・サクラがレイを連れていく神社
　→⑧ 福田神社
・レイとサクラが国境を叫ぶ広場
　→⑨ 大和ゆとりの森
・サクラが原付バイクで走る幹線道路
　→⑩ 道路標識「高座渋谷駅西口」
・リリックの再生回数を確認する図書館（基地反対のデモを見かける）
　→⑪ 高座駅前複合型公共施設 IKOZA
・のど自慢大会の会場の「市民会館」
（・兄が同級生にサクラの居場所を尋ねる歩道橋
　→⑦ 光ヶ丘歩道橋，大和市深見台１丁目）

サクラの訪れる場所（大和市キッズページ掲載地図をもとに後藤作成）。左下の直線は厚木基地の滑走路。

駆けていることが確認できる。だが同時に，南林間以北やつきみ野地区にサクラが訪れていないことにも私たちは気づく。

このことは映画の示す重要な提起が含まれているのではないだろうか。大和市内の交通（移動手段）に目を向けてみるとその意味が浮かび上がる。

大和市の主要交通網は東急田園都市線，小田急線，相鉄本線といった鉄道と，北から順に国道16号線，国道246号線，東名高速道路，国道467号線であるが，映画では小田急江ノ島線南林間駅以北から東急田園都市線沿線の中央林間駅やつきみ野駅周辺は描かれることはない。やや戯画的にいうなれば「東急田園都市線的なるもの」[14]が意識的に排除されている。

他方でサクラのつくるリリックには，次のように国道467号と米軍基地が紐づいてうたわれている。

> S・K・R　MCさくら　相模オリジナル
> Ah　Ah　4・6・7・thwack　4・6・7・thwack（3回繰り返し）
> ようこそ日本の中心地　大和市米軍基地近く
> 郵便番号242（ニーヨンニ）　隅っこ走る467（ヨンロクナナ）

原付バイクは手軽に移動の自由を与えてくれ，乗り手（と視聴者）に解放感を与える道具である。しかし，サクラの移動こそそうした喜びとは裏腹な関係であることが示される。米軍基地と，それに並行して敷設された国道467号線の間が「大和」であること。映画のロケーションは軍部によって軍事開発された地域のその後に，焦点を強くあてて構成されている。

(4) 基地のある郊外

さらに，ロケーションをみていく際に注意しなければならないのは，サクラが訪れた場所に意味論的な断層があることだ。

サクラがレイを最初に案内した神社をはじめ，ディスカウントショップ，ショッピングモール，漫画喫茶といった施設群がある。これらは典型的な郊外の景観を示しているだろう。

ディスカウントショップやショッピングモールは，サクラとレイが接近する舞台として描かれる。そのひとつのディスカウントショップでは，ところ狭しと商品が並んだ陳列にレイは目を見張り，質問を連投する。ロケ地はいずれも大和市内ではないものの，そのモデルは容易くみつけられる。いずれも鶴見駅から東へ延びる，片側一車線の幹線道路，ライラック通りにあるドン・キホーテ（写真2）と大和オークシティ（写真3）である。

大和オークシティはイトーヨーカドーとイオンモールを核とした大型商業施設として2001年1

写真2

ライラック通り沿いのディスカウントショップ
（2021年8月　後藤撮影）

写真 3

巨大駐車場を擁したショッピングモール
（2021 年 8 月　後藤撮影）

月に開店する。イオンは 1992 年からモールを展開し始め，イオンモール大和は 11 店舗目にあたる。関東では成田に次ぐ出店であり，首都圏では出店 1 店舗目になる（イオン株式会社 2021）。やや時間をおいた 2016 年にドン・キホーテ大和店が開店している。1990 年代末から 2000 年代初頭にかけての法整備により，郊外への大型店出店が促されたが，大和オークシティの出店は見事にこれと対応している。郊外化の先進的な地域として大和市は展開してきた。

こうした郊外的景観は，劇中でもしばしばみることができる。映画冒頭でリリック作成を中断し原付バイクで移動するサクラの背景に有刺鉄線付フェンスのロングショットが続く。そして，サクラが「高座渋谷西口」を示す道路標識（⑪）のある幹線道路を走るその道なりには，全国チェーンの飲食店や眼鏡ショップといった典型的なロードサイド的ショップが並ぶ景色が映し出される。

また，奇異かもしれないが，神社もまた，この街が郊外であることを示しているだろう。レイから一緒に出かけたいとせがまれたサクラが原付バイクに 2 人乗りになって出かけた神社は，急な階段が続く，小山になった場所にある。原付バイクを止める階段下までの道路は，住宅地の間を這うように走る細いものである。神社も区画整理事業によって移転することがある。ただし，移転には補償額が多額になることや年中行事を通じて地域社会と関係が深いこともあり慎重を要する[15)]。実際に付近を訪れると，この付近一帯が小高くなって見晴らしがよく，夕刻には犬を散歩させながら夕日をスマホにおさめる住人たちをみることができた。周囲を住宅に囲まれた神社は，大和市が宅地として開発されてきたことを示す。このようにサクラの訪れる建物群は大和市が郊外であることを示している。

しかし，映画にはこうした地点以外も存分に描かれている。サクラがリリックづくりの場としている二つの廃品置き場（そのうちひとつはキャンピングカーが置かれている）や，襲撃されたサクラが連れ込まれる廃屋がそれにあたる。映画のなかで重要な場所の一つが，サクラが徒歩で移動する道である。

サクラはこの道で，目的地をもたず歩く路上生活者たちを見かけ（この時，ヤンキー女子たちから石を投げつけられていた）たり，ライブハウスを追い出されてレイと共に奇声を上げて走り抜けたり，またレイと盛大なケンカをして家から飛び出して歩いているところを，ヤンキー女子たちに襲撃されたりしている。

この舞台となった場所は，桜森いこなーど（⑥，写真 4・6）と名づけられた桜森歩行者専用道 1・2 号である。東名高速道路を陸橋でまたいで大和市桜森 2 丁目 5 番地から 6 番地にかけてつながるこの歩行者道は，一方の終わりまで行きつくと有刺鉄線付のフェンスにぶつかる。その途中には，写真 5 のような在日米軍所属要員専用駐車場があり，基地の外側に米軍基地と日常的に出入りする人がいることを私たちに感じさせるものとなっている。まさにこの道は基地につながる道であるのだ。

さらにこの道を途中で左折すると，日当たりのよい墓地があり[16)]，そして「不法投棄禁止」の

写真 4

桜森いこなーどにつづく道。左手前に見えるのは在日米軍所属要員専用駐車場。この道を突き当たると米軍基地がある。（2021 年 8 月　後藤撮影）

写真 5

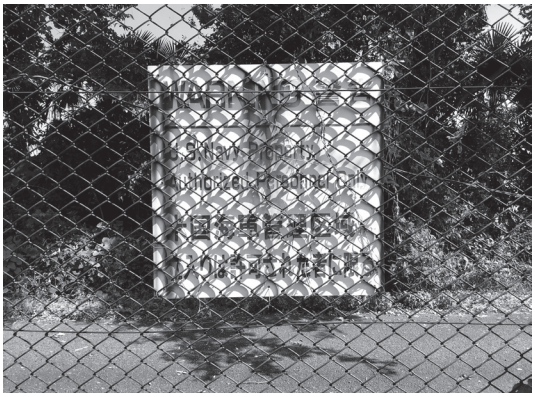
写真 4 手前の看板を拡大

看板の目立つ廃品置き場にたどりつく（写真 6・7）。いずれも敷地の奥まで進むと有刺鉄線付フェンスがある。基地の周囲にはこのような施設も存在している。

写真 6

桜森いこなーどから南東に進んだ先にある廃品置き場（2021 年 8 月　後藤撮影）

写真 7



フェンスの看板（2021 年 8 月　後藤撮影）
「米国海軍管理区域　立ち入りは許可された者に限定」と記されている。

ただ，これらの場所は，自動車に乗って移動するだけではなかなか場所を特定することはできない。歩く，あるいは自転車，原付バイクのスピードで移動するからこそ見つけられる可能性が高い。実際，筆者ら 3 人が現地を訪れたときに，なかば偶然に，この場所を見つけることができた。現地をよく知る地元の人だから知る舞台選定といえるだろう。

ここでサクラがうたった場所とリリックを思い

出したい。映画の冒頭で，サクラは自らの境遇を重ね合わせるように，大和を次のようにうたい込む。

S・K・R　MC サクラ　相模オリジナル
ここは神奈川さ　極東の要所
大和のくそさえない　ごみ処理場
ウチの名前はサクラ　がらくたの中　日々探し続けてる明日

そして，「何でもあるけど何にもないから　何でもあっても不安になるから」と続ける。またキャンピングカーでの作詞では，ノートに「まだ何にもしてないけど」と書きつけたうえで，つぎのようなリリックの練習を始める。

4・6・7・thwack　4・6・7・thwack
ようこそ日本の中心地　大和市米軍基地近く
郵便番号 242
隅っこ走る 467

最後に披露されるリリックとは対照的なこれらのリリックが披露されたのは，いずれも廃品置き場である。こうした立地，加えてリリックで書かれた次の単語たち，ごみ，大和，基地を並べると，リリックは強いメッセージを提起しているとみることができる。

ただ，墓地や廃品置き場は現代社会ではなくてはならないもののひとつである。現代の私たちの生活は，何かを消費することで日々を成り立たせ，生を全うする。2 章でみてきたように大和市は戦前から郊外として開発されており，役目を終えたモノたちは排出されてきた。役目を終えたモノはどこかに適切な形で収めなければならない。だが，つねに眼前にあるには心理的に負担がある。そうしたときに選ばれたのが，まさに基地周辺の場所ではないだろうか。

4. おわりに

(1) 厚木基地的なるもの

ここまで映画『大和（カリフォルニア）』を主軸としながら，その舞台である神奈川県大和市と厚木基地との関係について論じてきた。本論の知見を，先行研究を参照しながら位置付けていこう。

2 章で指摘したように，『大和（カリフォルニア）』で描かれる厚木基地は特徴的である。厚木基地の内部はわずかに映り込む程度であり，全くと言ってよいほど描かれることはなく，基地に所属する米兵も一切登場せず，没交渉である。こうした厚木基地の描写は，宮崎大祐監督自身の次のような認識が反映されていると思われる。「撮影の前，横須賀や沖縄など基地がある街を訪れてリサーチをして，厚木基地が他の基地と決定的に違うところを発見したんです。厚木基地は，500 万 m^2 を超える広大な敷地の中に，スーパーやボウリング場，コンサートホールや大学なんかもあって，他の基地と比べて，基地の中の人たちはほとんど外に出てくることはありません。だから，大和の街に住む人たちには，アメリカ人が身近にいるという意識はそれほどないと思います」（『第三文明』2018 年 5 月号：15）。厚木基地は，存在しているが見えない――いわば逆幽霊のように――「存在する不在」としてある。

したがって，本映画の登場人物にとっての厚木基地との関係性は，東谷（2005）や青木（2013）が記述してきたような，占領期の基地の町における米兵と日本人との直接的な交渉による影響関係とは異なるものである。また，サクラは，宮西（2008）や Johnson（2019 = 2021）が描出した，横須賀や沖縄の米軍基地および米兵と直接的な関係を形成して生活する女性たちとも異なる。横須賀や沖縄では米軍基地のプレゼンスは強力であり，地域社会を生きる人びとは基地によって規定されているからである。

それでは，映画『大和（カリフォルニア）』における，そして大和における厚木基地とはいかなる存在としてあるのか。それは外部からのまなざしを拒みつつ，騒音として（のみ）現出している。「安全・防犯上の理由から高い建物もまわりにはないですし，中を覗けないようになっているので，一年に数回あるお祭りの日にパスポートをもって中に入る以外はなかなかなにが起きているのかわからない状態です。本当にあの騒音だけが一方的なコミュニケーションといいますか，そんな感じです」（「宮崎監督が語る“大和市”」映画パンフレット：6）。Chion は，映画作品における，音源が映らない音声を「フレーム外」の音と呼ぶ（Chion1992 = 1993）。この映画においてのみならず，大和における厚木基地とは，まさに「フレーム外の騒音（爆音）」として在るのだ。

2 章で指摘されているように，この作品において，サクラは苛立つ者として描かれている。しかし，その苛立ちが何に起因するのかは明確ではない。おそらくこの苛立ちはそれを向ける明確な対象がいないのである。サクラは「存在する不在」である厚木基地に対してその苛立ちを向けることはできないでいるのだ。

（2）大和的なるもの――どうでもよい空間

3 章で巡ったように，この作品に描かれる大和は，市内の鶴間以南であり，そこはロードサイドのショッピングモールやディスカウントショップ，またコンビニエンスストアやマンガ喫茶――サクラがレイを連れて行くのはそうした場所である――に代表される，ある意味で典型的な，「何もない」郊外空間である。それと同時に，作品に描かれるのは，廃品置き場や，基地に隣接した広場や歩行者専用道路といった空間である。これらは，「何もない」郊外空間のなかにありながら，さらに積極的な意味を見出しにくい，いわば「どうでもよい空間」である。そして，3 章で実際に大和市内の厚木基地周辺で発見するのは，墓地や広場，廃材置き場といった，やはり「どうでもよい空間」である。これら「どうでもよい空間」は，厚木基地が「フレーム外の騒音」であるが故に形成されたものであると理解することができるだろう。すなわち，その空間の用途が，騒音の影響関係が薄く，かつ基地を高い場所からまなざすことのない，「どうでもよいもの」に限られてしまうということである。

厚木基地の周りにひろがるこうした空間――それは「大和的なるもの」と言ってもよいだろう――の指摘は重要である。それは米軍基地と地域社会に関する先行研究が捉えてこなかった空間だからである。たとえば，新井（2005）や木本（2011）は，東京郊外に所在する米軍横田基地とその周辺の地域社会との経済的および文化的関係性を論じているが，そこで記述される空間は，基地周辺の「米軍ハウス」や「基地前商店街」――文化的・経済的に有意味な空間――である。そうした記述から零れ落ちてしまうのが，大和の「どうでもよい空間」なのである。

（3）大和をレペゼンする

本作品のサクラは二重の意味で言葉を奪われた存在である。作品冒頭，サクラが廃品置き場で紡ぎ出すリリックは米軍機の騒音によって掻き消されてしまう。サクラの言葉はこの騒音によって奪われてしまっている。実際，続くシーンにおいて，サクラは駅前でストリートラップをする集団にラップバトルを仕掛けるが，すぐに言葉に詰まってしまうのである。

そして，サクラが移動し訪れるショッピングモールやディスカウントショップ，コンビニエンスストアといった「何もない」郊外に典型的な空間や，居場所にしている廃品置き場や広場といった「どうでもよい空間」は，サクラに言葉を与えてくれることはない。その意味でもサクラは言葉を奪われているのである。

では，本作品のクライマックスシーンにおける

サクラのラップを，私たちはどのように受け取ることができるのだろうか。

ことばに負け続けるくやしさ胸に　あくせく生き続けていく日々
そんなことよりもただ　自分の足で　この足で
たちあがるということ
やっとみつけたこの声　この居場所
インデペンデント　へい大和　応答せよ　わかってんでしょ
コピー元の無い本物になれるんだよウチら
澄ませよ耳　聞けよ声　死者の声　生者の声
ぜんぶまとめて生きてやる
これからはじまる　この国のストーリー

木本玲一は，ラップ音楽におけるローカリティについて，「実体論的ローカリティ」と「認識論的ローカリティ」に分類し，その両者の絡まり合いを論じている（木本 2020）。「実体論的ローカリティ」とは，実際の地理的な場所における諸条件を指し，「認識論的ローカリティ」とは，言説的な次元における実践者の空間感覚を指す。特にラップ・シーンにおいて，「実体論的ローカリティ」は，しばしば，貧困や犯罪などの治安の悪さといったネガティブな要素と結びつけられ，「（出ていきたいが）出ていけない」場所として表現される。それは日本のラップ・シーンにおいても同様であり，たとえば磯部涼が活写した川崎市南部を拠点とするラップ・グループ，BADHOP が典型的である（磯部 2017）。

貧困や犯罪ではないものの，サクラにとっての大和の「実体論的ローカリティ」は，やはりネガティブな性格を持つものであろう。先述したようにそれはサクラの言葉を奪うものであり，作品冒頭でサクラ自身，「大和のくそさえない／ごみ処理場／うちの名前はサクラ／がらくたの中／日々探し続けてる明日」と表現しているからである。

だが，クライマックスシーンにおけるサクラのリリックでは，そんな大和の実体論的ローカリティのネガティブさをもひっくるめて引き受けて（「ぜんぶまとめて生きてやる」），ほかでもないこの大和に拠って立つ意志（「自分の足で／この足で／立ち上がるということ」）が力強く宣言されている。実際，監督の宮崎大祐は，『大和（カリフォルニア）』の次作である『TOURISM』（2019 年）の公開に際し，『大和（カリフォルニア）』を次のように要約している。「前作の『大和（カリフォルニア）』では，故郷から出たいと思いながらもそこから出ることができない若者が，最後には外の世界に魅了されながらも，故郷で生きることの“光”を見出していく姿を描きました」（『第三文明』2019 年 8 月号：7）。

前述の論考において木本玲一は，ラッパーが「リプリゼント」，「レペゼン」するという行為は，ネガティブな要素と結び付けられた実体論的ローカリティを，自分たちが依って立つ真正なラップ実践の場所という認識論的ローカリティによって，ポジティブに書き換える行為であると論じている（木本 2020）。

クライマックスシーンにおけるサクラのラップ実践は，彼女の「レペゼン大和」として受け取らなければならないのである。

1）　塚田・西田編 2018。国道 16 号線は，大和市の北東部を通る。
2）「大和市の紹介」（http://www.city.yamato.lg.jp　2021 年 9 月 9 日閲覧）。
3）　2018 年の人口密度は川崎市に次いで県内第 2 位の 8688 人 /km^2（「ランキングかながわ（地域編）」https://www.pref.kanagawa.jp　2021 年 9 月 9 日閲覧）。
4）　矢倉沢往還（別名・大山街道，現在の国道 246 号線のルート）の宿駅として町場を形成していた下鶴間と純農村地帯だった他の 3 村とは，折り合いが悪かったという（大和市総務部総務課市史編さん担当編 2006：236）。

5）林間都市計画は，住宅地のほかにゴルフ場などの遊興施設や教育施設などを伴うものであり，相模カントリークラブ，大和学園（利光の娘・伊東静江が設立）として残っている。

6）東急会長の五島慶太は，1953年，東京南西部から神奈川県に続く丘陵地帯に「城西南新都市建設構想」を発表，東急多摩田園都市プロジェクトを始動させ，阪急の小林一三の手法を継承し，鉄道敷設を見越した住宅地開発を行った（松原1982）。

7）新興工業都市計画については，ひとまず浜田（2002）参照。都市計画法に基づく新興工業都市計画は，軍拡による郊外・地方への軍事工場の新設・移転に伴う都市基盤整備を支援するものであり，相模原が全国最大規模，大和は5番目の規模だった。1937年の陸軍士官学校の移転をきっかけに開始される相模原台地の軍事化については荒川（2015）。大和市域における海軍施設の集積，軍都計画と都市構造への影響については，大和市編（2002）および大和市総務部総務課市史編さん担当編（2006）参照。

8）大和市編2002：511。土地住民の半ば強制的な移転については，「聞き書き 厚木基地建設に伴う強制移転の様子」『大和市史研究』22号など樋口雄一氏らによる聞き取り調査がある。

9）ここでの引用は，大和市編1994：560による。

10）大和市編（2002）および大和市総務部総務課市史編さん担当編（2006）。

11）実際，墜落等により1950年代～70年代には民間人を巻き込んだ死傷事故が相次いだ（栗田編2011）。空母艦載機部隊が岩国基地に移転を完了し，100デシベルを超える騒音回数が大きく減少するのは，2018年のことである（『広報やまと』2021年3月15日号「特集 厚木基地をめぐる動向」：2）。

12）梅林宏道は，厚木爆同による1970年代からの4次にわたる爆音訴訟について，これまでに示された裁判結果は「騒音被害を認め，国による損害賠償は認めるが，飛行の差し止めは認めない，というもの」だとまとめている（梅林2017：211）。

13）自衛隊基地は有刺鉄線のないフェンスで境界を示している場合が多い。

14）塚田は国道16号線を論じた著書において，タレントのマツコ・デラックスの観察を紐解き，地域の人たちの「身の丈に合わない自意識」を「田園都市線的なるもの」と指摘している（塚田・西田2018：209）。

15）国による公共用地の取得に関しては，2001年「国土交通省の公共用地の取得に伴う損失補償基準」平成13年国土交通省訓令第77号によって，費用補償について明記されている。

16）筆者たち（後藤と塚田）が2019年にこの墓地を訪れた際，墓地の上空を軍用機が飛んでいた。ただ，管理をするスタッフによれば，墓参りをする休日には飛行機は飛ぶことは少なく，近年，岩国が訓練場となったため，違和感を覚えることは少ないと教えていただいた。駐車場を併設し，駅からも徒歩圏内，平地で日当たりもよくこの墓地を魅力的に感じる方も少なくないと予想される。

文　献

新井智一，2005，「東京都福生市における在日米軍横田基地をめぐる『場所の政治』」『地学雑誌』114。

荒川章二，2015，「相模原台地の軍都計画」荒川章二編『地域のなかの軍隊2 関東軍都としての帝都』吉川弘文館，189-201。

青木深，2013，『めぐりあうものたちの群像―戦後日本の米軍基地と音楽1945-1958』大月書店。

朝井志歩，2009，『基地騒音―厚木基地騒音問題の解決策と環境的公正』法政大学出版局。

東浩紀・北田暁大，2007，『東京から考える』NHKブックス。

Chion, Michel, 1992, *Le son au cinéma*.（川竹英克・J. ピノン訳，1993，『映画にとって音とはなにか』勁草書房）。

浜田弘明，2002，「軍事都市の都市計画―相模原都市建設事業を例に」上山和雄編『帝都と軍隊―地域と民衆の視点から』日本経済評論社，129-156。

磯部涼，2017，『ルポ川崎』サイゾー。

Johnson, Akemi, 2019, *Night in the American Village: Women in the Shadow of the U.S. Military Bases in Okinawa*.（真田由美子訳，2021，『アメリカン・ビレッジの夜』紀伊國屋書店）。

木本玲一，2011，「米軍基地を介した地域社会のグローバル化／ローカル化」遠藤薫編『グローバリゼーションと都市変容』世界思想社。

―――，2020，「ラップ・ミュージックにおけるローカリティの意味」東谷護編著『ポピュラー音楽再考』せりか書房。

栗田尚弥編，2011，『米軍基地と神奈川』有隣新書。

栗田尚弥，2020，『キャンプ座間と相模総合補給廠』有隣新書。
松原宏，1982,「東急多摩田園都市における住宅地形成」『地理学評論』55（3），165-183。
宮西香穂里，2008,「境界に生きる日本人女性たち―米軍基地をめぐるつきあいのかたち―」『コンタクト・ゾーン』 2 号。
無署名「首都圏のなかの米軍基地」『朝日ジャーナル』1969 年 6 月 29 日号。
無署名「聞き書き 厚木基地建設に伴う強制移転の様子」『大和市史研究』22，1996 年，90-112。
東谷護，2005，『進駐軍クラブから歌謡曲へ』みすず書房。
塚田修一・西田善行編，2018，『国道 16 号線スタディーズ―二〇〇〇年代の郊外とロードサイドを読む』青弓社。
梅林宏道，2017，『在日米軍』岩波新書。
大和市編，1994，『大和市史 6 資料編 近現代 下』大和市。
大和市編，2002,『大和市史 3 通史編 近現代』大和市。
大和市総務部総務課市史編さん担当編，2006,『大和市史 ダイジェスト版』大和市。
大和市政策部総合政策課編，2019，『健康都市やまと総合計画 2019-2028 年度』大和市。
広報誌『やまと』2021 年 3 月 15 日号。
映画パンプレット，2015，『大和（カリフォルニア）』。
イオンモール株式会社，2021,「イオンモールの沿革」『イオンモール公式サイト』（2020 年 8 月 30 日取得，https://www.aeonmall.com/static/detail/history）。